




論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者 宋 智亨	
論文担当者	主査 藤原 尚 
	副査 山本新吾 
	副査 八木 秀司 
学位論文名	Lymphatic spread patterns in young versus elderly stage III
	colon cancer patients
	(AYA 世代および超高齢者における Stage III 大腸がんリンパ節
	進展形式の後ろ向き探索研究)
論文審査の結果の要旨	
<p>リンパ節(LN)転移は大腸癌の最も重要な予後因子である。中枢へのリンパ転移は、リンパ節郭清の範囲と関連し、臨床的に重要であり予後不良因子として同定されている。しかし年齢とリンパ節の解剖学的位置の関係はまだ解明されておらず、中枢のリンパ節転移陽性率が年齢によって異なるかどうかは不明である。本研究では若年および高齢の結腸癌患者におけるリンパ節転移パターンとその予後への影響が検討された。1998年から2018年の間に日本の8施設でリンパ節D3郭清を伴う外科手術を受けた病理学的Stage III結腸癌患者を対象とし、45歳以下を若年者群、80歳以上を高齢者群として両集団のリンパ節転移の程度および転移パターンを分析した。若年者群210人と高齢者群80歳349人を集積した。郭清されたリンパ節の総数と転移リンパ節数は、高齢者群と比較して若年者群で有意に多かった(それぞれ$P < 0.001$, $P < 0.001$)。主リンパ節転移(L3)も、高齢者群よりも若年者群で高かった($p = 0.012$)。無再発生存期間における多変量解析では、主リンパ節転移は若年者群でのみ予後不良因子とされた(HR5.21)。結果として、Stage III結腸癌患者において、主リンパ節転移のリスクは若年患者で高く、生物学により悪性度が高いことが示唆された。さらに、主リンパ節転移の予後への影響は、若年患者で高いことがわかった。以上より申請者らは、若年患者では主リンパ節転移陽性の頻度が高いため、根治には主リンパ節を含むD3郭清が必須である、また高齢の患者においてもリンパ節D3郭清術が有効である可能性があると結論付けた。</p> <p>本研究によって、AYA世代結腸癌における高齢者とは異なったリンパ節伸展形式が明らかになり、治療戦略の開発につながる重要な知見が得られたことから、学位に値するものと評価した。</p>	